

文学部附置人文科学研究所報告

第一号

青山学院大学文学部

2019

目 次

| | | |
|--|---------------|---|
| 文学部附置人文科学研究所の設立と2019年度の活動について | 佐 伯 真 一 | 1 |
|--|---------------|---|

Contents

| | |
|--|---|
| Announcement concerning Founding the Institute of the Humanities and a Report of Research Projects in 2019. Shinichi SAEKI ... | 1 |
|--|---|

文学部附置人文科学研究所の設立と 2019年度の活動について

Announcement concerning Founding the Institute of the Humanities
and a Report of Research Projects in 2019.

佐伯眞一

Shinichi SAEKI

はじめに

青山学院大学文学部では、2019年4月1日に、新たに文学部附置人文科学研究所を設立した。それに伴って、『文学部附置人文科学研究所報告』を、文学部紀要との合冊で、毎年刊行することとなった。この点をまず報告する。

『文学部附置人文科学研究所報告』本号の原稿締め切り（2019年10月）の時点では、設立からまだ半年しか経っていない、生まれたばかりの研究所だが、ここで、その設立の趣意と研究所の組織や運営のあり方、そして本年度の活動について、2019年10月段階の現状に基づいて、簡単に報告しておきたい。

(1) 設立の趣意について

文学部では、現在ほぼ自律した5つの学科、英米文学科、フランス文学科、日本文学科、史学科、比較芸術学科で構成する学部の教育と研究を、よりグローバルな視点を持ち、学際的かつ有機的に運用する組織として文学部附置人文科学研究所を設立した。

文学部は、青山学院大学で最も早く1949年度に開設された後、人文科学の知を基盤として発展を続け、多種多様な人材と研究者を数多く輩出してきた。2012年からは現在の英米文学科、フランス文学科、日本文学科、史学科、比較芸術学科の5学科による体制を整えた。当初からの大きな特徴は、「英語の青山」の基となる質の高い外国語教育と共に、「国文科」ならぬ「日本文学科」の学科名称にも端的に表れた、言語、文学・芸術、思想、歴史と文化の領域を、日本と外国とで対照する国際的な比較の視点である。しかしポストコロニア

2 文学部附置人文科学研究報告1号

ルの時代と、昨今のITの進歩を活用した急速なグローバル化は、人文学研究の情報交換の質と量ばかりでなく、創作の在り方までを変容させつつあり、デジタル人文学を始め人工知能の研究領域も射程に入れた、より多国間における国際的で多面多層の文化交流を視野にいたれた研究を必要としている。他方で、研究情報の質、量、スピードにおける進歩は、研究者1人1人が対象化しうる専門領域を狭め、研究分野・領域の多元化を加速化させ、自分の専門領域以外の学的知の進歩について行けない、研究の孤立の状況を生みだしやすくなっている。

研究所を設置することによって、文学部5学科のそれぞれの研究と教育を結集し協同を可能にするハブを作り、文学部における研究と教育の布置が俯瞰できる体制を整えることができる。そこから学部の研究のみならず、学部5学科の教育の全体に関わる問題を検討し、対応策を立案し、実施することができる。また現代の抱える諸々の課題に時代に即した人文知によって取り組み、国際的かつ学際的な比較研究を遂行し、成果を公表することで社会貢献を果たせると考えられる。

研究所の設立によって、教員間の学際的学術活動のみならず、学部生、研究科生に対しても学科、研究科の枠を越えたよりグローバルな教育的な体験と、学際的な研究をうながし支援する場を企画、提供して、これまで以上に教員と大学院生、学部学生が協働し、一体感をもって目標の達成に邁進することができると考える。

(2) 2019年度の運営委員会について

本研究所は、所長1名、副所長1名、運営委員若干名を置く。所長は本学部の専任教員の中から、本学部教授会の議を経て、文学部長が委嘱し、研究所の業務を統括し、研究所を代表するものとする。任期は2年とするが、再任を妨げない。

本年度の運営委員は下記の通りである。

所 長 佐伯眞一（日本文学科教授）

副 所 長 金子真（フランス文学科教授）

運営委員 笹川渉（英米文学科准教授）、小宮京（史学科准教授）、

出光佐千子（比較芸術学科准教授）

(3) 2019年度の研究プロジェクトの活動

本研究所の研究プロジェクトには、学部所属教員からの応募に基づくものと、運営委員会

が企画する研究と教育活動に係わるものとの2種類がある（本年度の場合、運営委員会が企画するプロジェクトとしては、総合研究所と共催のシンポジウムを12月に予定している。下記「(4) 人文科学研究所・総合研究所共催シンポジウム」参照）。

前者は、文学部の専任教員で構成するが、必要がある場合は、本学部以外の学部の専任教員や、その他の特別研究員をプロジェクトの構成員に加えることができる。プロジェクトの設置期間は、1年とするが、所長が必要と認める場合は、この限りでない。当該プロジェクトの研究計画書・予算申請書に基づき、運営委員会の議を経て設置する。

本年度は、研究所自体の設立が4月のことだったので、研究プロジェクトの設置は、研究所設立と同時に募集を開始、6月1日（土）に締め切り、6月12日（水）の研究所の運営委員会で採否を決定するといった、あわただしいスケジュールの中で行われた。各プロジェクトは、その後直ちに活動を開始した。

本年度、応募によって設置され、活動を開始したプロジェクトは、① The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) 第二回国際学会 Modernism and Multiple Temporalities の企画・開催・運営、②動詞とその項—英語とフランス語の格構造を中心に、③公共空間における「短文のジャンル」、④現代詩人ケネス・レクスロスの日米に互る文学活動についての基礎的研究、⑤雑誌を用いた日本現代史研究の五つである。以下、その構成メンバーと研究目的を簡単に紹介しておく。【研究目的】は、基本的に各々の代表者から提出された申請書の記載によるものだが、①のみ、目的とした国際シンポジウムが既に終了しているため、申請書の文面に多少手が加わっていることをお断りしておく。

① The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) 第二回国際学会 Modernism and Multiple Temporalities の企画・開催・運営

【研究代表者】秦邦生（文学部英米文学科・准教授）

【チーム構成員】麻生えりか（文学部英米文学科・教授）、齊藤弘平（同・准教授）、Mary Knighton（同・教授）、来馬哲平（同・准教授）

【研究目的】本研究プロジェクトは、2019年9月12日～14日に青山学院大学17号館を会場として開催した国際学会 "Modernism and Multiple Temporalities" の企画・開催・運営を行うものである。この国際学会は、2017年秋に本研究代表者が、香港、中国、台湾、シンガポール在住の研究者たちとともに創設した、the Modernist Studies in Asia Network (MSIA) の第二回年次国際大会として開催したものである。今回の国際学会では、Laura Marcus (Oxford), Douglas Mao (Johns Hopkins), Aaron Gerow (Yale) という3名のモダニズム分野における主要な研究者たちによる基調講演が行われた。また、発表公募には、アジア圏の各国のみならず、アメリカ、イギリス、ヨーロッパ、中東地域など世界各地から約120名の研究者から公募が寄せられ、審査と選考を経た約100名の発表者が、「モダ

ニズムと複数の時間性」をテーマとした研究発表を行い、国際色豊かなイベントとなった。この国際学会の企画・開催・運営を通じて、本研究プロジェクトは以下の点を目的とした。①いまだに英語圏を中心としたモダニズム研究にアジアの観点をあらためて導入し、モダニズム研究のさらなる国際化と多様化を図ること、②日本を拠点として活動するモダニズム研究者たちと、アジア地域をはじめとした世界各地の研究者とのネットワーク構築の促進とその強化、③この国際学会を機会として日本を訪れる世界各地の研究者たちに対する青山学院大学の知名度の向上、ならびに本学を拠点とする研究活動に対する認知度の向上、の3点である。いずれも研究所の資金を活用して、所期の目的を達成することができた。記して感謝したい。

②動詞とその項—英語とフランス語の格構造を中心に

【研究代表者】尾形こづえ（文学部フランス文学科・教授）

【チーム構成員】中澤和夫（文学部英米文学科・教授）、金子真（同・フランス文学科・教授）、高橋将一（同・英米文学科・准教授）

【研究目的】格構造、特に初年度は英語とフランス語の与格、位格、および状況補語等の対立を言語事実に基づき研究する。各研究者の理論的背景の違いは尊重しつつ、テーマをめぐる言語事実を明確に提示し、分析・考察を進めていく。

英語は世界で最も研究されている言語であり、フランス語も英語に続いて研究されていると考えられるが、それぞれの言語についてこの分野のこれ迄の研究と現状はどのようなものが明らかになるようにする。分析は一定量以上の実例分析を基本とし、両言語において格関係（＝統辞機能）が文のタイプを特徴づけていて、これらの文のタイプが体系をなしている点に特に注目する。英語、フランス語でこれらの体系の共通点、相違が頻度数等の要素も踏まえて多少とも浮き出てくれば幸いである。

③公共空間における「短文のジャンル」

【研究代表者】France Dhorne（文学部フランス文学科・教授）

【チーム構成員】Sylvain Adami（文学部フランス文学科・准教授）、金子真（同前・教授）、〔以下は特別研究員〕安齋由紀（島根大学法文学部・准教授）、川口順二（慶應義塾大学・名誉教授）、木田剛（獨協大学外国語学部フランス語学科・教授）、志村佳菜子（東海大学・非常勤講師）、須藤佳子（日本大学商学部・准教授）、中尾和美（東京外国語大学・非常勤講師）、Baptiste Puyo（東京外国語大学大学院総合国際学研究院・専任講師）、松田里沙（筑波大学大学院韻文社会科学科博士課程在籍、都立葛飾総合高校、私立茗溪学園・非常勤講師）、山本大地（福岡大学人文学部・准教授）

【研究目的】本研究は、本学の協定校であるフランスのパリ第3大学と、ポー大学（UPPA）との共同研究の一環として行われるものであり、公共空間におけるさまざまなジャンル（看板、掲示、広告、展覧会のフライヤー、電車の車内放送など）に見られる、「短さ」を特長とする言語表現を、日英仏の対照言語学的観点から研究することを目的としている。これまで公共空間における発話は、「言語景観」の観点、もしくは社会言語学的観点から研究されてきた。それに対し本プロジェクトの独創性は、もっぱら言語学的観点からこの問題にアプローチしようとする点にある。とりわけ、公共空間における、短さによって特徴付けられる言語表現は、何らかの特有の文法に従うのか（その候補として現在、オノマトペや名詞文の多用、冠詞の省略、頭韻・脚韻の多様等が想定されている）、また言語以外の他の手段（イメージや記号等）と補完しあいながらどのように効果的にメッセージを伝えているのかを、通言語学的観点から明らかにすることを目指している。

8月3日に、公開研究会を開催し、プロジェクトのメンバー全員が発表を行った。さらに、10月10日～12日まで、フランスのUPPA大学において、開催されたシンポジウム（語彙とジャンルの境界）でDhorne、金子、須藤、中尾の4人が口頭発表を行った。

④現代詩人ケネス・レクスロスの日米に互る文学活動についての基礎的研究

【研究代表者】小松靖彦（文学部日本文学科・教授）

【チーム構成員】Mary Knighton（文学部英米文学科・教授）、西本あづさ（同・教授）、山崎藍（同・日本文学科・准教授）、来馬哲平（同・英米文学科准教授）、〔以下は特別研究員〕杉山和也（本学・日本文学・日本語専攻博士後期課程修了）、安藤優一（同・博士後期課程在学）、内村文紀（同・在学）

【研究目的】アメリカの現代詩人Kenneth Rexroth(1905-1982)は、日本文学の翻訳、第二次世界大戦時における日系アメリカ人の支援を行うなど、日本文化の深い理解者であった。その一方で、カリフォルニアを拠点に、絶対的な自由を求めてアメリカの詩に新たな潮流を生み出した。このように日米の文学交流において重要な詩人でありながら、日本ではその業績があまり知られていない。

2019年3月8日・9日に、本学文学部日本文学科主催・英米文学科協力の国際シンポジウム「文学による日米の架け橋—ケネス・レクスロス、翻訳・戦争 Rethinking the Legacy of Kenneth Rexroth: Literature, Translation, War」を開催し、日本文学研究者、中国文学研究者、アメリカ文学研究者の共同研究によって、レクスロス独自の翻訳の方法、戦争に対する文学者としての高いモラルなどを明らかにした。それと同時に、レクスロスの作品・エッセイなどの日本語訳が未だ少数であることが痛感された。また、神田外語大学図書館が所蔵する膨大なレクスロス・コレクションの多数の書き込みが、レクスロスの文学的営為を知る重要な鍵であることも知られた。

本研究は、レクスロスの主に日米文学交流に関するエッセイを紹介するとともに、活字化されていない蔵書の書き込みを、研究者に研究資源として提供することを目的としている。

⑤雑誌を用いた日本現代史研究

【研究代表者】小宮京（文学部史学科・准教授）

【チーム構成員】〔特別研究員〕佐藤信（東京大学大学院先端科学技術研究センター・助教）

【研究目的】本研究の目的は、雑誌を通して、日本現代史のさまざまな側面を明らかにすることである。

本研究代表者の小宮京は、日本現代史に関する論文を読む中で、意外なほど、雑誌に関する歴史研究が存在しないことに気付いた。例えば、いわゆる論壇誌に関する研究（竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子『日本の論壇雑誌：教養メディアの盛衰』創元社、2014年）を含め、社会学者による研究が多く、歴史研究はほとんど存在しない。

小宮は2018年度末に、「「読者モデル」の歴史的源流 1970年代の女性ファッション誌を中心に」（『青山スタンダード論集』14号、2019年1月）を刊行した。同論文は、あくまでも試論にとどまるが、あるテーマを設定して様々な雑誌を調査すると、日本現代史のさまざまな側面を明らかにできるとの確信を得た。その延長線上に、本プロジェクトは位置付けられる。

特別研究員を予定する佐藤信は、2018年度に史学科開講科目を担当してもらうと同時に、小宮が担当する基礎演習で、雑誌を用いて論文を執筆する方法を講義してもらった。前著『60年代のリアル』（ミネルヴァ書房、2011年）では『朝日ジャーナル』の、近著『日本婚活思想史序説』（東洋経済新報社、2019年5月刊）では、これまで知られていない結婚雑誌の雑誌研究を行っている。近現代の政治史研究を専門としながら、雑誌研究を通じて戦後社会の新たな側面を明らかにしようとする問題関心は研究代表者とも共通しており、共同でプロジェクトを展開することで、戦後社会の多面性を明らかにすることが期待される。

本研究プロジェクトは、雑誌というメディアを通じた歴史研究の端緒となるであろう。

(4) 人文科学研究所・総合研究所共催シンポジウム

青山学院大学文学部附置人文科学研究所と青山学院大学総合研究所の共催で、人文科学分野のシンポジウムを行う。これは、文学部附置人文科学研究所の設立を記念すると共に、総合研究所の研究ユニット「人文・社会・自然科学および学際的領域における総合研究を通じた研究ブランディングの探究」の研究活動の一環として開催するものである。

内容としては、従来、日本・東洋・西洋、また文学研究・歴史学・美術史学あるいは宗教

学などの個別の研究分野の中に閉ざされがちであった、世界の「聖なるもの」について、日本仏教文学・仏教美術・キリスト教美術・イスラム学などのさまざまな観点から光を当て、それぞれの文化の比較対照を通じて、人文科学の新たな視野を開くことを目的とするものである。

テーマ：「東西の聖なるもの—比較文化論を拓く—」

パネリストと報告タイトル（報告順）

二宮文子（本学准教授・東洋史）

「ムハンマド崇敬—イスラームにおける聖なるものの諸相—」

秋山聰（東京大学教授・西洋美術史）

「聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み」

阿部泰郎（龍谷大学教授・日本文学）

「聖徳太子宗教テキスト文化遺産の探求」

浅井和春（本学名誉教授・日本美術史）

「聖なるものとしての東大寺大仏—その美術史的、歴史的意味を考える—」

司 会：佐伯眞一（文学部日本文学科教授・人文科学研究所長）

水野千依（文学部比較芸術学科教授・総合研究所運営委員）

時 期：2019年12月21日（土）14:00～17:00

会 場：青山キャンパス大会議室（14号館12階）

おわりに

以上、簡単ながら本年度の活動報告に代えたい。最初に述べたように、本年度の各プロジェクトの活動は年度途中から始まり、現時点ではほとんどのプロジェクトが未だ活動途中であるため、ここでは、どのようなプロジェクトが始動したのか、概略を掲載するにとどめた。しかし、次号には、上記（4）のシンポジウムをも含めて、本年度の研究プロジェクトの本格的な活動報告を掲載し、以後、順次、前年度の活動をこの場で掲載してゆく予定である。

執筆者

(専攻)

佐伯 眞一

所 長

文学部附置人文科学研究所

秦 邦生

准 教 授

文学部英米文学科

尾形 こづえ

教 授

文学部フランス文学科

DHORNE, France

教 授

文学部フランス文学科

小松 靖彦

教 授

文学部日本文学科

小宮 京

准 教 授

文学部史学科

青山学院大学文学部附置人文科学研究所報告 第1号

2020年2月25日 印刷

2020年3月1日 発行

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

編集兼
発行者

青山学院大学文学部附置人文科学研究所

代表者 佐伯 眞一

〒102-0072
印刷所

東京都千代田区飯田橋3-11-7
株式会社ワコー
